２０１６年度　ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心」

あそびの足跡

～たどると分かるあそびのふり返り～

5歳児らいおん組
雨上がりの園庭探索に出かけた場面では雨粒に映った風景などの不思議さに触れたりました。またスライム作りでは水の分量を工夫して友だちと協力して試行錯誤するなど楽しんでいました

すごくのびるスライムできた！

なんで落ちないんだろ？

なんだろう？

０歳児りす組
ジョウロや穴あきペットボトルから水が出てくる様子を眺め、「何かある」という気持ちが膨らんでいました。手を伸ばし触ってみると「冷たい」「いい気持ち（感触）」！！　この体験から容器から水シャワーが出ることが少しわかり、何度も繰り返し遊びを楽しんでいました。

社会福祉法人　ゆずり葉会

深井こども園

もくじ

０．はじめに・・・１

１．　本園の考える「科学する心」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．「あそびの足跡　～たどるとわかるあそびのふり返り」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

３．気づきの分類・・・２

５．各クラスの実践報告

◆０歳児　　りす組　　「にぎにぎ・ぎゅー・ぱちん！」・・・・・・・・２、３、４

◆０．１歳児　　ひよこ組　　「冷たい！なんだろう」・・・・・・・・・・・・・・・４、５

◆１歳児　　うさぎ組　　「ここにいれるには・・・こうしたらいいんだ」・・６、７

◆２歳児　　あひる・ぺんぎん組　　「あ！色がかわったよ」・・・・・・・・・・・・・・・８、９

◆３歳児　　ぱんだ組　　「ダンゴ虫って不思議だね」　・・・・・１０、１１、１２

◆４歳児　　きりん組　　「ピカピカの泥団子」～砂・泥あそびの活動を通して～
・・・・・・・・・・１２、１３、１４

◆５歳児　　らいおん組　　「育てた野菜の種から野菜を育てよう」
・・・・・・１５、１６、１７、１８

６．実践の考察・・１９

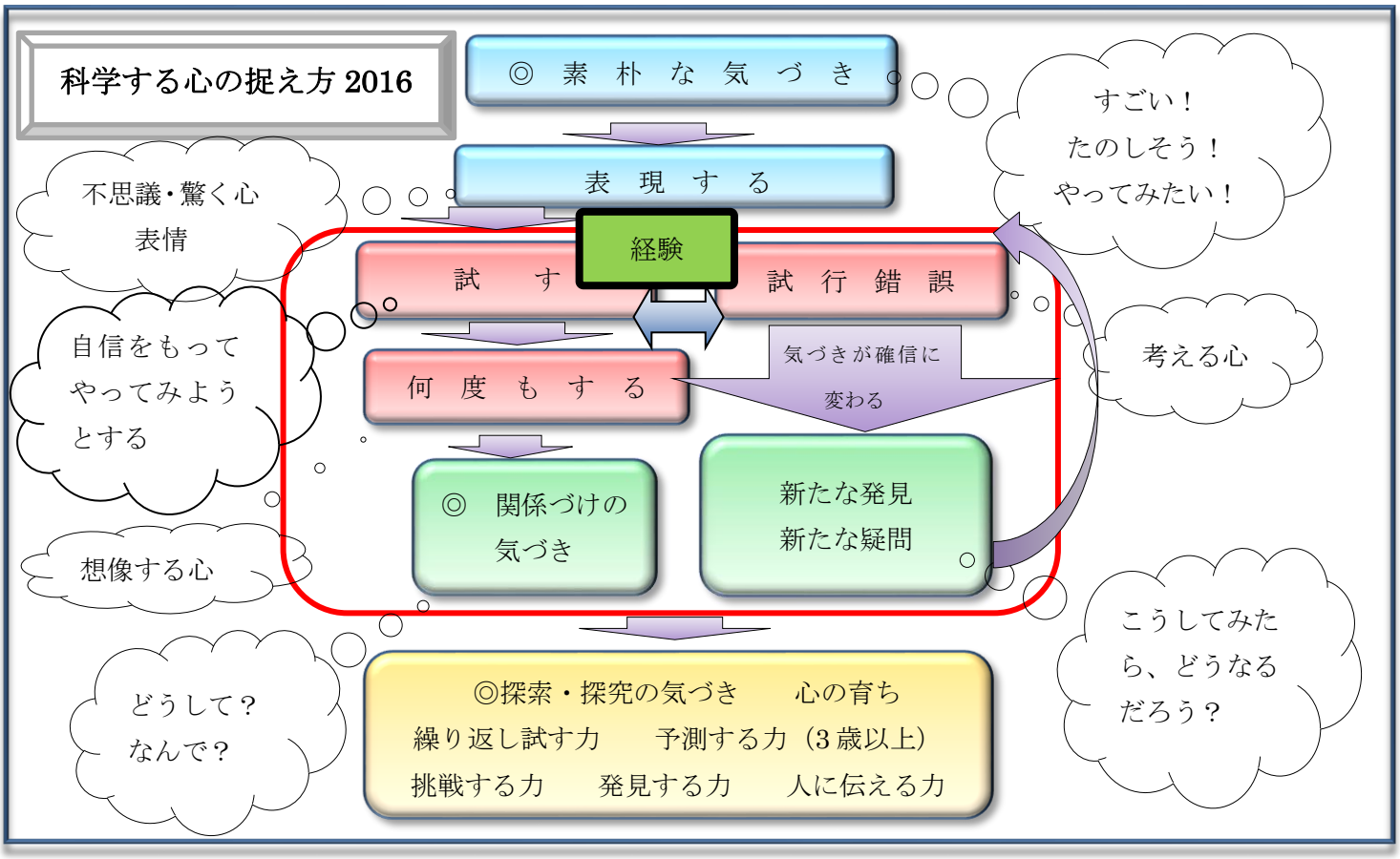
７．今後の方向性・計画・・・２０

８．園内研修の取り組み・・・２０

０、　はじめに

堺市内にある本園は、すぐ裏に幹線道路はあり交通量が多く、自然が少ない場所にある。自然を身近に感じながら心身ともにのびのびと成長してほしいと願い、園庭に様々な樹木を植えている。モッコウバラのアーチ・小川や池・泥の広場もあり豊かな自然環境を心掛けている。

１、「科学する心」についての捉え方



※この表は 2011 年に作成したものを園内研修にて職員間でバージョンアップさせたものである。

２、『あそびの足跡』　～たどると分かるあそびのふり返り～

本園は、科学する心の論文を始めて６年目になる。子どもの気づきを保育者が気づくことから「あれ？！」「なんだろう？！」の気持ちをより膨らませていけるような保育を大切にしている。

前年度は、「遊びの継続」「育ちの継続」に着目し取り組んできたことで、進級後も同じ遊び、育ちを意識しながら保育に取り組み楽しむ姿が見られた。

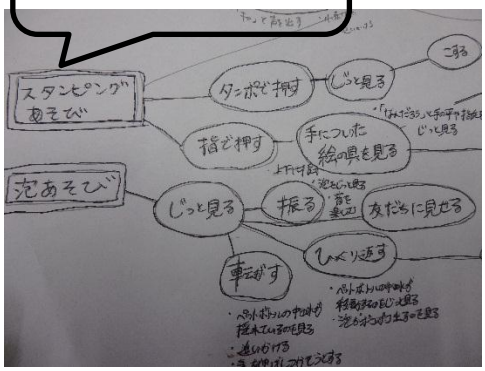
だが、「継続」ということを意識しすぎて、活動の中で広がった他の遊びを楽しもうという意識が保育者の中でも低く、子ども達の様々な気づきや体験のチャンスを無意識のうちに見逃していたように思う。

そこで今年度は「あそびの足跡」というテーマを設定して保育に取り組むことにした。「あそびの足跡」とは写真のように現在子ども達が興味を持っている遊びを起点として今後予想される活動内容の広がりを予想しながら示したものである。保育者が次の活動の広がりに対して予想、振り返りをしながら、物的、人的環境の準備をおこなって行く事で子ども達の活動の中での気づき、育ちにどのような変化が見られるようになったか整理していきたい。

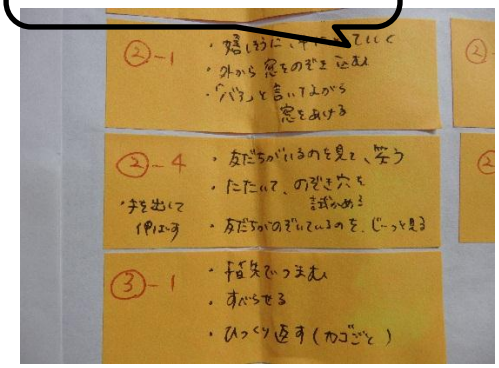
また、今年度は本園の特徴でもある「園庭環境」の活用を重視しながら保育を展開してきた。私たちの園だからこそ芽生える科学する心を紡いでいく。

※子どもたちが活動の中で気付きや体験を重ねていく中で、大きく成長した瞬間を論文中に「気づきが確信・自信に変わった瞬間」として赤字で表記している。

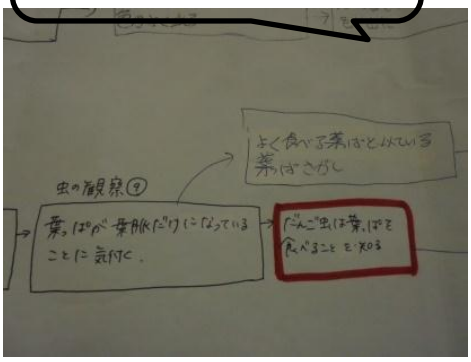
遊びの足跡の写真
0・1歳児　ひよこ組



子どものつぶやき・表情を
場面ごとに記録する



気づきが確信・自信なった瞬
間には赤枠で強調した



３、気づきの分類

昨年までの取り組んできた気づきの分類を、あそびの足跡をたどる視点でもう一度確認した。

〇素朴な気づき　（あそびの足跡の始まり）

「あっ！」「ふしぎ！」「おもしろい！」など、色々な遊びの中で見つけた素朴な気付き（偶然の気づき）が、「たのしいな」「うれしいな」の気持ちになっていく。子どもの気づきや気持ちに保育者が気づき、見つけたことを一緒に喜び合ったり、心を揺さぶられるような環境を作ることで新たな気付きが増えていく。

〇関係づけの気づき　（あそびの足跡の広がり）

たくさんの素朴な気づきの経験から、同じ遊びを繰り返し楽しむ中で「これしってる」「これ、まえとおなじ」と関係づけの気づきが生まれてくる。繰り返し楽しめるような環境を作ることで、「こうなったから、こうなった」と遊びを楽しみながら確認をしていく。

〇探索・探究の気づき　（あそびの足跡の深まり）

関係づけの気づきの中で、「なんでだろう？」「もっとしりたい」という気持ちが出てきて、子ども自身で考え試してみようとする姿が探究・探索の気づきになってくる。友だち同士で一緒に試したり思ったことを伝え合えるような環境を作っていくことで、より気づきが深まっていく。

０歳児　りす組　「にぎにぎ・ぎゅー・ぱちん！」

＜素朴な気づき＞　**場面１**　「さわりたいな！」（４月上旬～４月中旬）

６ヵ月

なにかな？

７ヵ月

色鮮やかに咲いている花や視界に入り目にとまったおもちゃを「これはなに？」と手を伸ばし触ろうとしていた。伸ばした手が目の前の物に当たると驚いた様子で手を引っこめたり又、握ろうと指を動かす姿もあった。

＜素朴な気づき＞　**場面２**　「さわれた！つかめた！」（４月中旬～５月下旬）

指先の力がついてきて色々な物を触ったり掴んだり握ったりしている。大きくて握れなかったりツルツルしてすべる物は角をつかもうとしたりすべってつかめない時には何度も繰り返してつかもうとしていた。触る事で素材や形を確かめるようにして遊んでいた。

７ヵ月

ぎゅー

６ヵ月

９ヵ月

◎素朴な気づき⇒関係付けの気づき　**場面３**　「ひっぱってみよう！」（６月上旬～６月下旬）

指先でつまんで引っ張る遊びを楽しむ姿が見られるようになってきた。筒にチェーンを入れ端を少し出しておいたり、クリップ付きの紐に吊るしたハンカチを手で握って引っ張って遊んでいた。「いないいないばあー」遊びも顔にかかったハンカチを自分で引っ張ってはずしたり、箱にガムテープを貼って少し端を外しておくと気づいてテープの端を掴んで指に力を入れて動かしていた。くっついているガムテープがビリビリはがれていく感触を楽しむようにゆっくり手を動かしていた。テープの端を左手の指先でつまんでいたが、箱からなかなかはがれないと右手に持ち替え力を入れてギューと引っ張ってはがしていた。

◎素朴な気づき　**場面４**　「あれ？のびる！」（６月下旬～７月中旬）

ゴムを通したビーズやボタンのついたボードを見て「あれ？」「なんだろう？」と興味を示しさっそくそばに寄って行って引っ張って遊んでいた。ゴムが伸びて手をはなした拍子に「パチン！」と音がすると一瞬ビックリした表情を見せるもののおもしろくて繰り返し引っ張っては離して遊んでいた。ゴムが伸びる感触も楽しんでいるように感じた。風船を手でつかみ結び目の所を横にギューと引っ張って伸びる感触を楽しみその拍子に手が離れ「ボン！」と音がするとその音も楽しんでいるように感じた。初めはそーっと引っ張っていたがゴムの伸びる感覚がわかるとおもいっきり引っ張っては離しを繰り返していた。引っ張る遊びを繰り返し遊んでいく中でゴムの伸びる感覚に気づき風船を持った時に自然と引っ張って遊び伸びる事を確かめているかのように感じた。

◎素朴な気づき⇒関係付けの気づき 場面５ 「ひっぱってみよう！」（8 月初旬～8 月中旬）

指や手の力がついてきたので引っ張っても取れにくい物も用意してみた。

床に貼った端を少し折り曲げたビニールテープを見つけると「なんだろう？」と近付いてきてじっと見ていた。折れた端がうまくつかめない様子だったので端を立てておくとつかむことができ指先に力を入れてぐいっと手前に引っ張っていた。はがれていく感触がおもしろく長いビニールテープははがれたところを持ち替えて引っ張りやすいようにして最後まではがしていた。高月齢児は短いビニールテープをはがすと床にもう一度くっつけようとする姿があった。

《考察》「触ってみたい、確かめてみたい、やってみたいという気持ち」

見て触りたいという思いから手を伸ばし、手でなでるように触っていたのが指先に力を入れて掴んだり、握ったり、引っ張ったりするようになってきた。ぶらさがっていた物が引っ張ることで取れたり、くっついていた物が引っ張ることではずれたりすることがおもしろく繰り返し遊んでいた。ゴムとの出会いで伸びるという感覚も感じていたように思う。今までは引っ張れば取れていた物が引っ張っても取れない。握って自分の方へ近付いてきても手を離すと元の場所にもどっていく。そんなゴムの伸びるという感覚に気づいて楽しんでいたように思う。色々な物と出会い色々な遊びをしてきたので（たどってきたからこそ）同じ引っ張るという行為でも遊び方が色々あり、指先に力がつくなど成長、発達することで遊び方が広がっていくのがわかった。

０・１歳児　ひよこ組　冷たい！なんだろう

今年度、数々の感触あそびをしてきた。その中でも氷遊びは、初めての経験であった。氷を前に置いてあげると、手を伸ばし触ると思わず手を引っ込めたり、触ると濡れた手をまじまじと見たり、繰り返し初めて触った氷にびっくりしていた。

◎素朴な気づき 場面１ **「ピチャピチャ楽しいね！」**（６月初旬）

雨の日、テラスに出て雨が降っている様子を見ていると「ピチャン！」と雨で濡れていた場所にハイハイで移動し手をついた。「あれ？」「なんだろう？」と不思議に思い、もう一度触れると「ピチャン！」とテラスの床に水しぶきがあがった。面白いと思ったのか、何度もピチャピチャと床を叩きだし、そのうち座り込んで両手で叩いて水しぶきをあげていた。

◎素朴な気づき 場面２ **「冷たい！気持ちいいね！」**（７月上旬）水の感触や音が「楽しい！」「面白い！」と思い始めていることから、いつでも触ることが出来るよう、タライに水を用意した。

タライに水をはっておくと、タライの中を覗き込み、わくわくとした表情で手を伸ばした。水面を両手で叩いているとピチャピチャと顔に水しぶきがかかり「冷たい！」という表情を見せた。初めはピチャピチャと楽しんでいたが、慣れてくるとバシャバシャとダイナミックに楽しんでいた。

◎素朴な気づき 場面３ **「初めての氷」**（７月下旬）

「冷たい！」「気持ちいい」という思いから、形が変化する氷ではどのような姿を見ることが出来るのかと思い、氷を用意した。

氷を置いてみると、「冷たい！」という表情をしながら何度も触ったり、氷を握るとポタポタと水が指の間から出て溶けていくのを見たりと、氷の感触を楽しんでいた。

◎素朴な気づき→関係づけの気づき 場面４ **「とれないなぁ…」**（８月上旬）

氷の中に玩具を入れると、中の玩具を指で取り出そうとする姿があり、モールやリボンを入れ、引っ張ったり、つまんだり出来る氷を用意した。

氷の中にモールやリボンをを入れて凍らせておくと、指先でモールをつまみ出し「お！」という表情をし、製氷皿から氷を取ることができたことに喜んだり、掴んで氷をコップに移し替えたりしてあそんでいた。

◎関係づけの気づき　場面５ **「わー！取れた！」**

小さな氷だけではなく、大きな氷を置いておくとどのような反応をするのだろうかと思い、カラフルなチェーン等の玩具を入れて凍らせた大きな氷を用意した。

玩具を入れて凍らせた大きな氷を置いておくと、「わー！」と驚いた表情で近づき、じーっと見ていた。そして大きな氷をなでるように触っていた。中のものを取り出そうと両手で触り溶かそうとしていた。なかなか玩具が出てこなかったが、諦めずにずっと氷を触っている姿も見られた。氷が徐々に溶け、中の玩具が出てくると、そっと玩具の先を指先でつまみ、滑りながらも必死で取ろうとしていた。取れると「お！」と氷の中から出てきた玩具を持って喜びの表情を浮かべていた。玩具が出てくると引っ張ろうとする等繰り返し楽しんでいる姿が見られた。透明の氷の中に玩具が見えているが、取れそうで取れないことに気づいていた。

≪考察≫「伝えたい気持ち・やってみたい気持ち」

あそびの足跡をたどってみると、色々な感触あそびを子どもたちと楽しんできたことが改めて見えてきた。その中でも場面３以降の氷あそびは子どもたちの興味深い姿として見えてきた。自ら手を伸ばすことで、氷の心地よさや、透明の氷の中に玩具が見えているが取れない不思議さ等、氷特有の性質を使ってあそぶことにより面白さを全身で感じている姿が見られることに気づいた。

子どもたちのあそびの足跡をさらに繋いでいくために、今後もじっくり遊べる時間の中、『ナニナニ？ワクワク！ウワァ～！！』と自らの心が躍るような気持ちから始まる体験を乳児期からたくさん行い、心の土台をつくっていきたいと思う。

１歳児　うさぎ組　ここにいれるには・・・こうしたらいいんだ！

昨年度、入れ込み遊びを始めた頃は入ったかどうか覗いて確かめる行動が見られたが、何度も遊ぶうちに“ここから入れると入っている”という確信が持てるようになり、年度末には確かめる行動も見られなくなった。

今年度は“いっぱいいれたい”という思いを受け止めるところから始めた。色々な穴に合わせて入る場所を探していた春頃から、少しずつ“ここにいれたい”“これをいれたい”と入れる素材や場所にこだわりを持つ姿が見られてきた。穴の形や大きさ、入れる素材を少しずつ変え難しくしていくと、色々と自分で試してみて、“こうしたらはいる”“こうしたらいれやすい”というのを見つけられている子どももいた。また、指先も器用になってきて、小さな穴や物にも集中して入れられるようになってきた。

◎素朴な気づき⇒試行錯誤へ 場面１「いれたい！」（4 月上旬）

牛乳パックを輪切りにしたものやカード、ペットボトルキャップなどの素材と、それぞれの大きさに合わせて穴を開けた段ボールや、穴の開いた容器などを用意した。素材と穴が合わず入らない時は、力を入れて押し込もうとしている。また穴に入る大きさの素材に変えたり素材の大きさに合った穴を探したりなどしながら、たくさん入れようとする姿が見られた。

◎素朴な気づき→関係付けの気づき 場面２「ここにいれたい！」(4 月中旬)

この穴がお気に入り

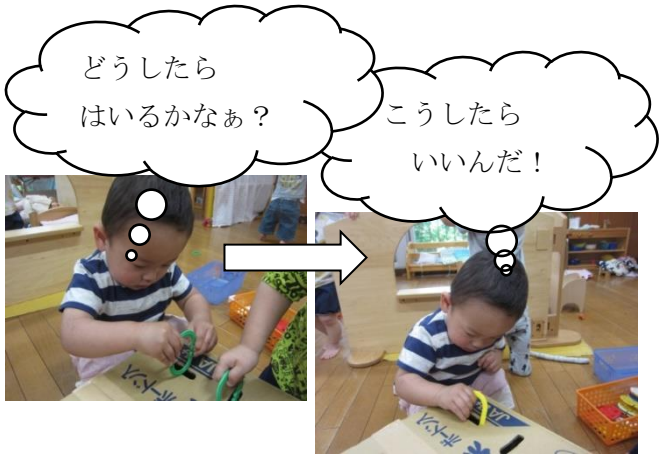
段ボールの向きを変えてみると…

Ｈちゃんは、色々な穴に自分が持っていた輪切りの牛乳パックが入るかどうか試していた。うまく入る穴を見つけると、そこにばかり入れ始めた。保育者が段ボールの向きをさりげなく変えてみても、“ここなら必ず入るから、同じ穴に入れたい”いう気持ちがあったのか、自分で段ボールを回転させて同じ穴を探し入れていた。この姿はＨちゃんのみに見られ、その他の子どもたちは色々と合わせてみながら入る穴を見つけていっていた。継続して遊んでいくと、他の子どもにも同じような姿が見られるようになった。

◎関係付けの気づき 場面３「どうしたらはいるかな？」（６月上旬）

チェーンリングを穴に入れようとしていたが、向きが違うため入らなかった。入らないから違うもの、と持ち替えるのではなく、“これをいれたい！”と、手でぐっと押したり、縦向きだったおもちゃを横向きにしたり寝かしてみたりと、向きを変えながら何度も試していた。やっと入れることができた後からは、一度ですっと入れられていた。

夏頃には形も分かり、迷うことなく一度で入れられるようになっていた。



場面４「こうしたら…はいった！」（６月上旬）形を合わせて入れ込むことを楽しめるようになってきたので、少し入れにくい素材も用意するようにした。

こうしてみよう

毛糸をペットボトルに入れようとしたＳちゃん。穴と毛糸の先をじっと見つめ繰り返していたが、毛糸は揺れて入れにくいと分かると、糸の先を持ち固定させて入れる姿があった。また側面に開けていた穴に入れるときは、同じように先を持ってもうまく入らないため、指先でぐっと押し込むようにしていた。遊びを継続していくと、難しそうにしていた子どもも、同じような形で入れられる姿が増えてきた。

これはこう！

◎素朴な気づき・関係付けの気づき

場面５「はいるかな…」（８月上旬）

できるかな？

ぜったいに
いれるぞ！

真剣な表情で太いストローの中に細いストローを入れて遊ぶ姿が見られた。同じ太さのストローを合わせ、なかなか入らず“やって！”と持ってくることもあった。繰り返しあそぶ間に、片方のストローを太いものに持ち直す子どももいた。細いもの同士を入れ込もうとしていたため集中し、入りにくい時には顔を近づけてよく見ようとしていた。

《考察》「試行錯誤しようとする気持ち・何度も試そうとする気持ち」

あそびの足跡を辿ってみると、４月は入れ込むこと自体が楽しいといった様子であったが、次第に“ここに入れたい”“これを入れたい”といったこだわりが見られるようになってきたことに気づいた。場面２のように同じ穴ばかりに入れるのは、“ここなら必ず入る”と確信を持ったからではないかと感じた。同じ時期に木製の入れ込みボックスで同じ形ばかりを繰り返し入れる姿が多く見られたのも同様の理由だと思う。８ 月には、小さい穴に小さいものを入れようとする姿も出てきて、“できるかな”“やってみよう”と試す様子も出てきた。様々な素材を用いて入れ込み遊びを繰り返し、足跡をたっどていくと、入れにくいものもこうしたら入るのでは…と持ち方や向きを変えると入ることに気づく姿が増えてきたと思う。これらの姿から、繰り返し遊ぶ中にも試行錯誤する力がついてきたのではないかと感じることができた。

乳児期は特に一日一日のめざましい成長が見られる時期である。小さな穴に入れ込む（ひも通し）・ぴったり合わせる（パズル）など、今後も入れ込み遊びを中心に形や大きさの違いを感じたり興味を持ったりできるよう個々の育ちに沿う形で進めていきたい。

２歳児　あひる・ぺんぎん組　　あ！色がかわったよ

日々の遊びの中で、同じ色のおもちゃを集めてコマやおうちを作ったり、様々な色のシールを用意すると、てんとう虫の上には白、葉っぱの上には黄色のシールというようにこだわりを持っている姿がある。

◎素朴な気づき⇒試す　場面１「色がかわった１」（４・５月）

洗濯遊びをしているとき、雑巾で「ごしごし」と遊具の側面を拭きだし濡れることで色が変わった。すると「あれ！なんか色かわった」と驚きの声。色が変わった跡を不思議そうに見て他の所も色を変えようと濡らしていた。また、指先やローラー、雑巾に水をつけ段ボールや花壇のレンガに形をつけて遊んだ。指で線を描いたり、手の平の形を付けたりして色が変わるのを楽しんでいた。また、乾いて消える様子をじっと見て「あれ？」と不思議そうに、何度も同じ場所に水の跡をつけていた。

◎素朴な気づき⇒試す　場面２「色がかわった２」（６・７月）色に興味を持っている子どもがいるので、染め遊びをしてみたらどうか？と思い用意した

色の変化を楽しめるよう染めあそびをした。絵の具に白い画用紙をつけると、「あかになった！」「きいろになった！」と驚いていた。色が変わったことが嬉しかったのか、何度もつけては絞り、染まっていくのを確認しながら繰り返していた。その中で、ピンク色の和紙を赤の絵の具につけるとあまり色が変わらず、「あれ～？」と不思議そうな表情を見せていた。

◎素朴な気づき⇒試す　場面３「色がかわった３」（７月）

画用紙にサインペンで絵を描いた後、霧吹きで水をかけた。吹きかける度に色が薄くなりにじんで広がっていく様子を「うわあ～！」と夢中で見つめる子どもや、画用紙の端っこを持って色を動かし、画用紙を全部赤色にしようとする子どももいた。また、黄色と青色のペンの色が重なり「みどりになった」や、にじんでいく中で色が混ざり合い「みて！くろになったで」と色が混ざって違う色になることに気づく姿があった。

◎試す・何度もする　場面４「色がかわった４」（８月）　色水遊びではどんな色の変化を楽しめるのか？

わかりやすい赤・青・黄色のみにした

赤・青・黄色の色水を置いておくと、カップに移し替えていただけの子どもが、違う色と混ぜ合わせ、色が変わると「あれ…？」と不思議そうに見つめたり、「メロンジュースや！」等と見立てて遊ぶ姿が出てきた。“どんな色になるのかな？”と、いま持っている色と違う色ができるという偶然性を楽しみにしているようだった。混ぜると違う色に変わるということが確信に変わった瞬間だった。

◎試す・表現する　場面５「何ジュースがいい？」（８月）ジュースに見立てる子どもが多かったので、ごっこ遊びを楽しめる環境を作った

出来上がった色水でジュース屋さんごっこが始まった。「いらっしゃいませ～、何がいいですか？」「ぶどうください！」等とやりとりをしながら、友だちのコップになみなみと注いであげたり、お盆に乗せて運んだりしていた。こぼれそうになると「こぼれるで！」と言い、そうっと大切そうに受け渡しをしていた。また、他にも「バナナください」と言われると、また色々と試しながらイメージしている色を作り、「はいどうぞ」「ありがとう」と、色水を遊びの中に取り入れながら色んな友だちと関わっている。

いらっしゃいませ～

こぼれるで！

◎試す⇒経験⇒関係づけの気づき　場面６「できたよ」（８月）

みて！ぶどうできたで！

お茶になった…

ジュース屋さんの経験から「この前作ったぶどうジュースを作ろう！」と色水を混ぜていくと「あれ？オレンジジュースになった」や、「みどりになった」と色々と試していた。何度も試してみる中で「あっ！ぶどうできたで！」と嬉しそうに友だちに伝えていた。「どうやって作ったの？」と保育者が聞くと「これとこれ混ぜた！」と赤と青の色水を指さし、得意げな表情を浮かべていた。また、それを見ていた周りの子どもたちもどんどんと「あかちょーだい！」「あおまぜる！」と言ってぶどうジュース作りが始まった。

《考察》「気づいたことを保育者や友だちに伝えていく力」

子どもの遊びをたどってみると、色に興味を持って遊ぶ姿が盛んに見られた。色の変化に気づく子どもが少人数だったので、「もっと大勢の子どもに気づいてほしい」と思い、赤・青・黄色の３色に限定していつでも色水で遊べる環境を作った。すると少しずつ周りの子どもも色に注目し出し、みんなが積極的に色を変化させる遊びを楽しめるようになった。みんなで“ぶどうジュースを作ろう”という共通の目的を持つと、色々な色を混ぜ合わせてもブドウジュースにならなかったりしたが、何度も繰り返し作ろうとしていた。また、“友だちと一緒に作った大切なジュース”という思いから、ジュース遊びをする際には、とても丁寧に扱ったり、友だちと「何がいい？」「めろん！」などやり取りがどんどん増えていき、自分たちでごっこ遊びを楽しむ姿があった。家や子ども園などでの生活経験の中で自分の知っているジュース、好きなジュースと同じ色ができるととても喜び、“みて！わたしの好きなジュースと同じ色ができたよ”というようにみんなに「みてみて」と見せる姿が多く見られた。また、気づいたことを保育者や友だちに伝えることに喜びを感じ、さらに「やってみよう」と意欲的に遊んでいた。遊びの足跡の続きを考え、これからも子どもがおもしろいと思える遊びを継続していきたい。

３歳児　ぱんだ・こあら組　　ダンゴ虫って不思議だね

昨年度、ダンゴ虫の飼育を体験した子ども達は、葉っぱの下や湿った所にダンゴ虫がいることを気づいていた。今年度も飼育や観察を通して子ども達の気づきや育ちに寄り添いながら遊びを広げていくことにした。

◎素朴な気づき

場面１「ダンゴ虫の家を作ろう」（５月上旬）

雨の日の園庭を探索していると葉っぱの下から今までに見たことがないくらいたくさんのダンゴ虫がいることを発見した。子ども達は「すごい！」「こんなに見たことがない！」と驚き、「飼ってみたい！」という声が出てきた。さっそく飼育ケースを用意すると昨年度の経験から「土を入れないといけない」「葉っぱを入れないとお腹が空く」「石も入れないと登れない」と子ども達が積極的に用意している姿が印象的だった

◎関係づけの気づき

場面２「白いのは何だろう？」（５月下旬）

しばらくダンゴ虫の観察を続けていくと飼育ケースの中に「白いダンゴ虫いるね」と子ども達が発見した。よく観察してみると「白いダンゴ虫動かない」と不思議そうな表情。保育者と一緒に図鑑を見てみると、同じ様な白いだんご虫が載っていて「死んでしまうと白くなる」と書いてあった。子ども達はダンゴ虫が死んでしまったことにショックを受けたような表情を見せていたが一人の子どもが「こっちのダンゴ虫白いのにちょっと動いてる！」と気づいた。同じように調べてみると「ダンゴ虫は脱皮をする」と書いてあり。子ども達は「同じ白やけど動いてる方は生きてるんやな」ということに気づいた

◎関係づけの気づき

場面３「オスとメスの違いは何？」（６月上旬）

観察を続けていたある日の朝、ダンゴ虫に赤ちゃんが生まれた。初めて見る白い小さなダンゴ虫に子どもたちは興味津々。するとじーっと見ていた子どもが「ダンゴ虫のお母さんってどれ？」質問してきた。保育者が「これだよ」と背中に黄色い模様のあるダンゴ虫だと伝えると、子どもたち同士で「これがお母さんなんやって」と伝え合いながら実際に手に取り観察していた。また、以前から入れていた落ち葉が葉脈だけを残して無くなっていることに気づき「ダンゴ虫ってホントに葉っぱを食べてるんや」と図鑑の知識しかなかった内容を実際に目にして体験したことで気づきが確信に変わってきたようだった。

◎探索・探究の気づき

場面４「どれがおいしい葉っぱかな？」（6 月下旬）

ダンゴ虫食べた葉っぱを見て、本当に食べる事に確信を持ちよく食べている葉っぱとまったく食べていない葉っぱが飼育ケースの中にある事に気づいた。園庭に飼育ケースを持ち出した際に「これどの葉っぱやったかなぁ」と葉脈だけになった葉っぱと見比べながら「おいしい葉っぱ探そう」と葉っぱ探しを始めた。
最初は飼育ケースに入れたダンゴ虫を見つけた木の所に行き「ここの下にいっぱいいたからこれかも」と少し丸みを帯びたくすのきの葉っぱを持ってきた。しかし他の子ども達から「こっちの方が形が似てる気がする」と少し細長いケヤキの葉っぱを持ってきた。どちらがダンゴ虫の好きな葉っぱかしばらく観察していくと、くすのきの葉っぱの方が食べられてきているようだが、現状では確信にはいたってない。

◎関係づけの気づき

場面５「外のダンゴ虫は大きい！」（7 月下旬）

園庭のプランターの下から出てきたダンゴ虫を見つけて「動きが早い！」や「大きい」などと自分たちが飼育しているダンゴ虫との違を発見。他の場所にあるプランターを動かしても同じように大きなダンゴ虫が出てくる様子に子どもたちは「なんでやろ？」と不思議に思ったようだ。

◎探索探究の気づき

場面６「どうすれば元気になる？」（8 月上旬）子ども達にどうすれば元気になると思う？と聞くと「エサが足らないのかな？」と話していたので「何を入れてみようかと保育者が声をかけてみた

しばらくプランターの下の元気なダンゴ虫と飼育ケースのダンゴ虫の違いを観察していると、図鑑や絵本をよく読んでいた子どもから「土をもっと入れたほうがいいんじゃないか」や「石もたくさん入れる？」「お家（ケース）は暗いほうがいいかな」などと意見が出てきた。さっそく土や石などをたくさん入れるなどプランターの下の環境に近づけようとしてみた。しかしケースを暗くしてみようという取り組みでは、最初ケースを棚の下の段に入れてみたが思ったよりも暗くならずにダンゴ虫に変化も見られなかった。「どうしようか？」とみんなで相談して「何か貼ってみたらどうやろ」ということになり試してみることにした。
飼育ケースの外側に画用紙を貼っていくと「ここあいてるで」「もっと暗くしないと」と言いながらダンゴ虫の住みやすい暗い家を作っていた

◎探索探究の気づき 場面７ **「どっちが元気？」**（8 月下旬）

画用紙を貼り中を暗くした飼育ケースをしばらく観察していると子ども達の間から「元気よくなったかなぁ？」という声が聞かた。さっそく園庭に飼育ケースを持っていき比べて見ることにした。いくつものプランターを動かして園庭のダンゴ虫を捕まえて飼育ケースの中のダンゴ虫と比べて見ると「どっちも動きが早い！」「元気になった！」とうれしそうにしていた。また「白いダンゴ虫いなくなった」や「赤ちゃんいっぱい増えてきてる」などと自分達がダンゴ虫の部屋を暗くしてあげたことで、ダンゴ虫にとって住みやすい飼育環境に変化してきている事に喜びを感じているようだった。

≪考察≫「観察する力・疑問を解決する力」
去年飼育した経験からかダンゴ虫は湿った土、葉っぱを食べるということを覚えている子どもが多かった。しかしダンゴムシとの関わりの足跡をたどってみると、昨年とは違い長期間観察が続いていることで興味が深まり広がり、子ども達の中に「これなんだろう？」という様々な疑問が生まれていた。できるだけ観察できる時間や機会を増やし見守ると、疑問に思ったことを自分なりの考えで試して解決しようとする姿がたびたび見られるようになった。また、図鑑を用意しておくことで、文字が読めなくても写真をみて図鑑で調べて見比べる姿も出てきた。その中で気づいたことや面白かったことを友達同士で会話し楽しむ姿も見られこの年齢の育ちが見られるようになってきた。
自然を大切にした園庭環境でじっくりと継続して遊ぶ中で、子ども達はダンゴ虫の飼育を通し自然の不思議さに数多く出会う場面が見られた。今後も自然豊かな環境を活用し子ども達の「なんだろう？」という思いに寄り添いながら保育を行っていきたい

4 歳児　きりん組　ピカピカの泥団子～砂・泥あそびの活動を通して～

◎素朴な気付き 場面１ **「何を作ろうかな？」**（前クラス時）

３歳児の時から園庭に出ると、土と水を混ぜ合わせて、ケーキやプリンを作りごっこあそび、容器の底にさら砂と水を入れ固まり作りをしていた。「きれいに作るにはさら砂がいるよ」と年長児から教えてもらい、平らなお皿に砂を入れ左右に振り残った細かい砂を使いさら砂づくりをしていた。「触ってみて？」と保育士や友だちに言い、「さらさらの砂やね」と言われることを喜んでいた。

泥団子を作りだすと、水分の量が多いのでギュギュと手で握り、年長児の真似をして水気を落としていた。「きれいな泥団子作りたいな～」「どうやって作るん？」と友だち同士で話しながら見せ合う姿も見られた。

◎関係づけの気付き 場面２ **「いつもと違う泥あそび　～お店屋さんごっこ～」**（５月上旬）

異年齢で泥団子屋さんやお好み焼き屋さんごっこをした時「団子よりもお好み焼きの方が水多くした方がいいな」と水の量を多くしたり少なくしたりして、量を比べあっていた。

泥団子屋さんをした際に、いつも作っている固めの泥団子を作ると串（木）が刺さらず、木が折れてしまう子が何人もいた。
A児「固いの作ったら刺されへん」B児「もう少し水多くしたらいいんちゃう？」C児「でも多すぎたら丸くならんで」と水分の量を用心深く調節しながら泥団子をつくっていた。

◎関係づけの気付き・素朴な気付き

場面３　**「いつもと違う土の感触　～雨上がりの園庭で～」**（６月上旬）いつも晴れの日しか団子を作らないので雨の日で、あえて湿り気のある土でどんな反応を示すのか子どもたちになげかけてみた。

その後も水たまりの泥水を使って色々なあそびが続けられていた。
泥水をペットボトルに入れてためておくと次第に砂が底にたまり砂と水に分かれることを発見した。A児「こっちはコーヒー！」「こっちは紅茶！」保育士「どうして色が違うん？」B児「コーヒーは下に泥入ってるねん！だから濃いねん！」と水の量を少しずつ増やしてドロドロにしていた。雨上がりの園庭ではごっこあそびが続けられ、段々水の量を多くするとドロドロになり、少なくすると硬い泥団子ができやすいことが分かるようになってきた。

雨上がりの園庭でさら砂を作っていると晴れている時の乾いた砂と感触が違うことに気づいた。「いつもよりも少ないけどさら砂はできるよ」と少しさら砂ができると、手の平の感触や見た目で細かい砂をたくさん作っている姿があがった。

◎探索・探求の気付き 場面４　**「ピカピカの泥団子を作りたい！」**（６月下旬～７月上旬）

きれいな泥団子を作りたいということも増えてきて、園庭に出るたびに泥団子を作ろうと砂場周辺に座り込んでいた。また園庭のどの場所が一番さら砂を集めやすいか、あちこち探して回り思いの場所を見つけるとさら砂集めに夢中になり、自分の中で泥団子の作り方を見つけたようだった。作った泥団子を少し上から落としてみたり、遊具の坂から転がしてみたりと自分たちで試しながら遊ぶ姿も見られ、少し壊れてしまうと「大丈夫！」とまた水を少し含ませた土をかぶせて遊んでいた。

築山から泥団子を転がしてみた。「壊れない！」と思った子どもたちも泥団子を転がしてみると「あれ？」「壊れちゃった…」と自分が作った泥団子と壊れなかった友達の泥団子を比べていた。
A児「なんでBちゃんの泥団子壊れへんの？」B児「ギュギュって固くしたからかな」C児「きれいなサラ砂もかけてるからやんな？」と友だちに意見を聞いたり、自分の工夫を言ったりと伝え合う姿が見られた。

◎探索・探求の気付き

場面５　「土が２つに分かれたよ！」（８月上旬）よりきれいな泥団子を作りたいという子どもの思いから土を自分たちで作ってみてはどうかと土づくりを提案した。

ジュース屋さんごっこをした際にペットボトルに入れた泥水と砂が分かれたのを発見してから、今度はペットボトルの中に石が多めのざら砂とさら砂の２種類の砂と水を入れて振ってみた。少し時間を置いて中を見ると３層に分かれていた。「なんか線できてる！」と砂が分かれていることに気づき、「さら砂はふわふわやからや！」「石入ってたらざら砂になるで」と普段泥遊びをしていることもあり、子供たちは大発見したときの驚きをそれぞれ言葉で表していた。

≪考察≫「目当てを持って遊ぶ力・比べて遊ぶ力」

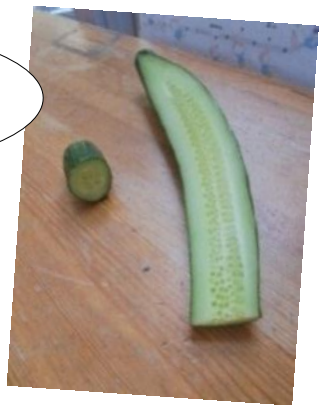
砂場へ行くと水と土を混ぜ泥遊びをするようになった子どもたち。あそびの足跡をたどってみると初めは泥が苦手で触れない子どももいたが、保育士が泥団子を作り、そこにさら砂をかけて一緒に作ってピカピカにすると、“自分でもやってみよう”と泥を握れるようになっていることに気づいた。そして継続して活動していくうちに園庭の土は毎日感触が違うと子どもたちの中でも分かり始めた。晴れの日と雨の日では土の感触も違えば完成した泥団子の触り心地も変化することに気づくようになっていた。このように”乾いた土と湿った土ではさら砂の出来栄えが全く違う”ということも子供たちは遊びの中で学び、「固い団子を作るにはさら砂がいる」「団子に木を刺したいから水を多くする」など目的をもって遊ぶようになっていた。子どもの思いや気づきをたどってみると“土の感触が違う”という思い（素朴な気付き）から「さら砂作り」「水の量の調節」「あそびの展開」と考え、工夫する中で　土の違い（関係づけの気付き）やもっとつるつるにするにはと（探索・探求の気付き）がうまれていったように感じる。
雨上がりの園庭はあちこちに水たまりができていて泥団子を作る最高の場所である。３歳児の時から容器の底に泥をためて、ピカピカにするあそびの継続がさら砂作りと泥団子作りへの関心を深める。あそびの足跡の続きを考えるにあたって子どもたちが目標としているピカピカの泥団子を作れるよう、今後も色々な泥で試し、経験してきたことを活かして継続し、一人ひとりの活動に目を向けて、あそびの環境を用意していこうと思った。

５歳児　らいおん組　「育てた野菜の種から野菜を育てよう」

昨年、キュウリの栽培を経験したことから、今年はもっと多くの野菜を育てたいという声があがり、ジャガイモやキュウリ、トマト、ナスビなど栽培をすることにした。そして、野菜を育てて自分達で種を取り、その種で次は野菜を栽培したいという思いが生まれた。

◎素朴な気付き

場面１　**「種を見つけたよ」**（５月下旬）



キュウリとトマトを収穫。包丁で切り、縦と横の断面を見てみると、「種の並び方がちがう」「種の数が変わった！」と違いに子どもたちから口々に声があった。また、トマトの“種”は、はっきりと分かる子どもが多く、キュウリは、種と気づかず、“模様”という子どももいた。しかし、友だちの「種やで！」「そんな形してるもん」と友だち同士で声を掛け合う姿や、野菜の断面を描いた絵本を見つけ、「ほら、やっぱりこれは種やで！」と話していた。日頃食べているトマトやキュウリの中に、種があることに気づき、形や大きさによっても違うことや、種の大きさも変わることに驚いていた。

赤くなる前に落ちてしまった緑色のトマトを見つけると、「みどりのトマトの中はどうなってるのかな？」と切ってみることにした。子どもたちから、”種がある”“種はまだない”という２つの意見に分かれた。

早速切ってみると、「あれ？種がない！！」と緑色のトマトの断面には種がなかった。・・・が、もう一度角度を変えて切ると、種を発見！赤くなったトマトに比べると、種の量は少なかったが、「緑色のトマトにも種あるんや！」と驚いていた。

どちらが美味しいか両方のトマトを切って食べてみると、赤いトマトは食べ頃で緑のトマトは「キュウリの味がする」「少し硬い」ということが分かった。

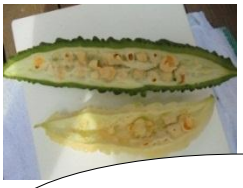
保育者が「赤いトマトと緑色のトマトの種、どちらが大きいのかな」と聞いてみると、「やっぱり赤い方が種の数が多い！」「トマトの種も一緒に増えていくんやなぁ」と驚きの声。夏野菜の栽培、収穫を経験し、野菜の断面を見て、野菜の中にある種の存在に興味を持った子どもたちの姿が見られた。

種の数って変わるのかな？

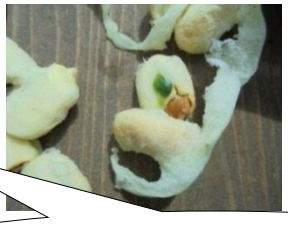
◎素朴な気づき

場面２「いろいろな種を見てみよう」（６月中旬）

種に関心を持ちはじめた姿から、色々な種に触れることができる機会を作った。



皮の色は違うのに、中は同じ色だったよ



種の周りぐにゅぐにゅしてる

栽培しているゴーヤが大きくなり「ゴーヤの中ってどうなっているのかな」と問い掛けてみると、「キュウリみたいになってる！」「種が入っていると思う！」「中も緑色かな？」「家で食べた時は、中に何も入ってなかったで」など子どもたちから様々な経験談が出てきた。実際に切ってみると、「うわぁ、何これ！？」「やっぱり種ある！」「なんかぐにゅぐにゅしてる」とゴーヤの断面を初めて見る子どもも多く、柔らかい綿のようなものに種が包まれていることに驚いていた。スプーンで種を取り出してみると、種が皮のようなものに包まれており、「これ（皮）を取ったら、硬い種がある」「種もゴーヤの匂いがする」と不思議そう。ゴーヤの種にも関心をもち観察していた。

◎関係づけの気づき場面３　「いろいろな種を比べてみよう」（６月中旬）

音が鳴る種もあるよ！！

ゴーヤにも種があることが分かり、他の野菜にもどんな種があるのか興味をもち始めた。

「この前、カボチャの中に種あったで！今度持ってくる」という声があり、家庭で食べた野菜や果物の種を集めることにした。友だちが持ってきたことが刺激となり、次々に「先生！見て！昨日モモ食べたら、モモの真ん中に種あったで！」と自信満々な表情で持ってくれる子どもが増え、種が集まった。

集まった種の大きさ、形、数、手触りなど手に取り見比べてみた。「同じももの種なのに大きさが違う」「こっち（小さい種）はまだ、ももが小さかったんかなぁ」「きゅうり、めろん、うりは種が似てる」「ボコボコしてるのと、ツルツルしてるのがある」「振ったら音が鳴るよ」「小さい種はたくさんあって、大きな種になると数が少くなるのかなぁ」など触って比べてみた。集めた種の中で一番大きな物はマンゴーで、一番小さな物はトマトだった。

◎素朴な気づき

場面４「きゅうりの種を植えてみよう」（７月初旬）

２日後

４日後

優しく植えてあげよう

収穫したキュウリに種が入っていることに気づき、種を取出し、その種を植えるとキュウリが本当に育つのか試してみることにした。植える前にきゅうりの種を乾燥させていると少しずつ色が変化してきた。「もう植えてもいいかな？」「もう少し待った方がいいよ」と子どもたちのそれぞれの声があった。そこで植えるものと、植えずに観察をする種に分けることにした。「そうっと置いてあげよう」「芽でてくるかな」と自分たちで集めた種に期待も高まっていた。また、お米のモミを水に浸けていたという経験を思い出し、残った種には水を入れて水栽培として観察することにした。

◎関係づけの気づき

場面５「種も変身するよ」（６月下旬）

マークをつけておこう！

植えたキュウリの種から芽がなぜ出てこないか話し合いをした。すると、「種が小さいから芽が出ないかも」という意見がでてきた。なぜ種が小さいのかを尋ねてみると、「きゅうりが小さいから種も小さい。」「前は春に植えたから、もう遅いと思う」「きゅうりを大きくしたらいいと思う。」と話し、種が大きくなるようにきゅうりを大きくなるまで観察することにした。

◎関係づけの気づき

場面５　**「種の変身」**（７月下旬）

種も大きくなってる

３０ｃｍ程大きくなったきゅうりを切った。「種、本当に大きくなっているかな」「でも（種の大きさ）変わってないかもしれない」と中身がどのようになっているのか楽しみにしていた。早速切って見てみると「すごい！種も大きくなって、並んでる！」「種の周りが柔らかくなってる」「こんなキュウリ初めて見た！」と驚いていた。みんなと、種を一粒一粒丁寧に取り出していくと、「種が硬くなってる」「すいかの種にも、こんな白い種入ってる」と、知っている種に見立てて話をする姿もあった。

◎探索探究の気づき

場面６**「種を育ててみよう」**（７月初旬）

たくさん集まった種を“育ててみたい”という声が上がり、水栽培を行うことにした。

カップの中に水を入れ、種を浸け観察したが、「水が臭くなってきた」「芽がなかなか出てこない」と上手くいかない様子に子どもたちも「どうしよう・・・」と悩んでいた。

お米のときも、こうしたね

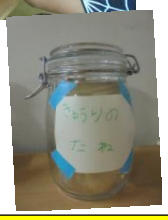
春の経験

「前にお米（のモミ）したとき紙を敷いてた」「同じようにしてみれば・・・」とお米のモミを育てた経験を思い出し、クッキングペーパーに水を浸し敷いた上に種を置いて観察することにした。水が乾燥してなくならないようにと、子どもたちで水やり当番を決め、毎日観察する姿など、“自分たちで”お世話をするという姿が目立ってきた。

◎探索探究の気づき 場面７ **「どうして芽が出ないの？種博士登場！」**（８月下旬）

種を水に浸けて３週間が経過してもなかなか芽が出てこないこと。「なんで僕たちの種からは育たないの？」という疑問が生まれた。「お店に売っている種と、みんなで収穫したキュウリの種と何が違うのかな？」と問い掛けてみた。「水の浸け方が違う」「大きさが違う」「僕たちの種の周りには菌がついてるから」「大きくなりすぎて種の中が腐ってしまってる」と様々な意見が出てきた。家庭でも、調べてくる子どもたちがいましたが、確信に至らない様子で、園の隣にあるＪＡに方から種に詳しい方がいるということを聞き、来園していただくことになった。

JA の種博士に、「どうして芽が出ないの？」という質問をすると、種の取り方について“種を洗いまわりの滑りを取り除く”“水に浸けて沈んだものを選ぶ”“水分を吸う素材の上で２週間乾燥させる”などポイントとなることを教えてもらった。「種取ったとき、ヌルヌルしてたけど、洗わなかった！」「カップで干してしまった。」など種取りをした時のことを思い出し、「だから出ないんや」「もう一回やってみよう」と再挑戦することになった。しかし、「キュウリは寒さに弱い」という種博士の話を聞き「じゃあ今からやったら遅いなぁ。」「次の夏はみんな小学校に行ってる」など口々に話していると、“種の保管”の方法を教えてもらい、「じゃあ、きりん組がらいおん組になったときに植えれるように、種を残そう！」という思いに変化した。



種博士から聞いた種のとり方、保管の方法で、キュウリの種をみんなと包み、瓶の中へ入れた。「涼しい所がいいで」「暗いところって言っていたよ」と教えてもらったことを思い出しながら、保管場所を探した。また、「僕たちが一年生になるときに渡そうな！」と新たな楽しみも生まれていた。

≪考察≫「協力して観察する力・知りたいという気持ち・友だちへ伝える力」

夏野菜の栽培、収穫を通して、実の生長段階によって種の大きさや数が変化することに気づき野菜の種に興味を持ち始めた。種についてもっと知りたいという思いから、子どもたちが自ら家庭で種を探し持参し様々な種の種類を見比べることなど多くの発見や驚きがあった。栽培した野菜から種をとり、野菜を栽培したいという思いから今までに経験してきた方法で試してみたがうまくいかず、次は芽を出す種を作りたいという思いに変化し、キュウリの色が変わるまで大きく育て、しっかりとした種を採ることができた。その種を使い「次は芽が出る」という確信を持ち育て始めたが、芽が出なかった。家庭で保護者に聞いたことを書いてきたり、図書館へ行って調べたりする子どもの姿が見られたが、確信には至らなかった。そこで、正しい方法を知りたいという思いから、JAの方に来ていただき教えてもらうと、今年できた種は来年の春から植えることを知り、年中児へと種を引き継ぎたいという思いへと変わった。

子どもたちの思いは“種から育ててみたい”から“年中児へ引き継ぎたい”という思いに変わったが、その過程を振り返ると、様々な方法で試し、失敗を経験した子どもたちは、うまくいかないときには、みんなと知恵を出し合ったり、調べたり、違う方法を思いついたりと、みんなと一つのことに焦点を当て長期間取り組もうとする姿がみられた。子どもたちが夢中となり一つのことを追求したいという思い、考えを試し、実践できるよう、これからも声に耳を傾け、試していける環境を用意していきたいと思う。

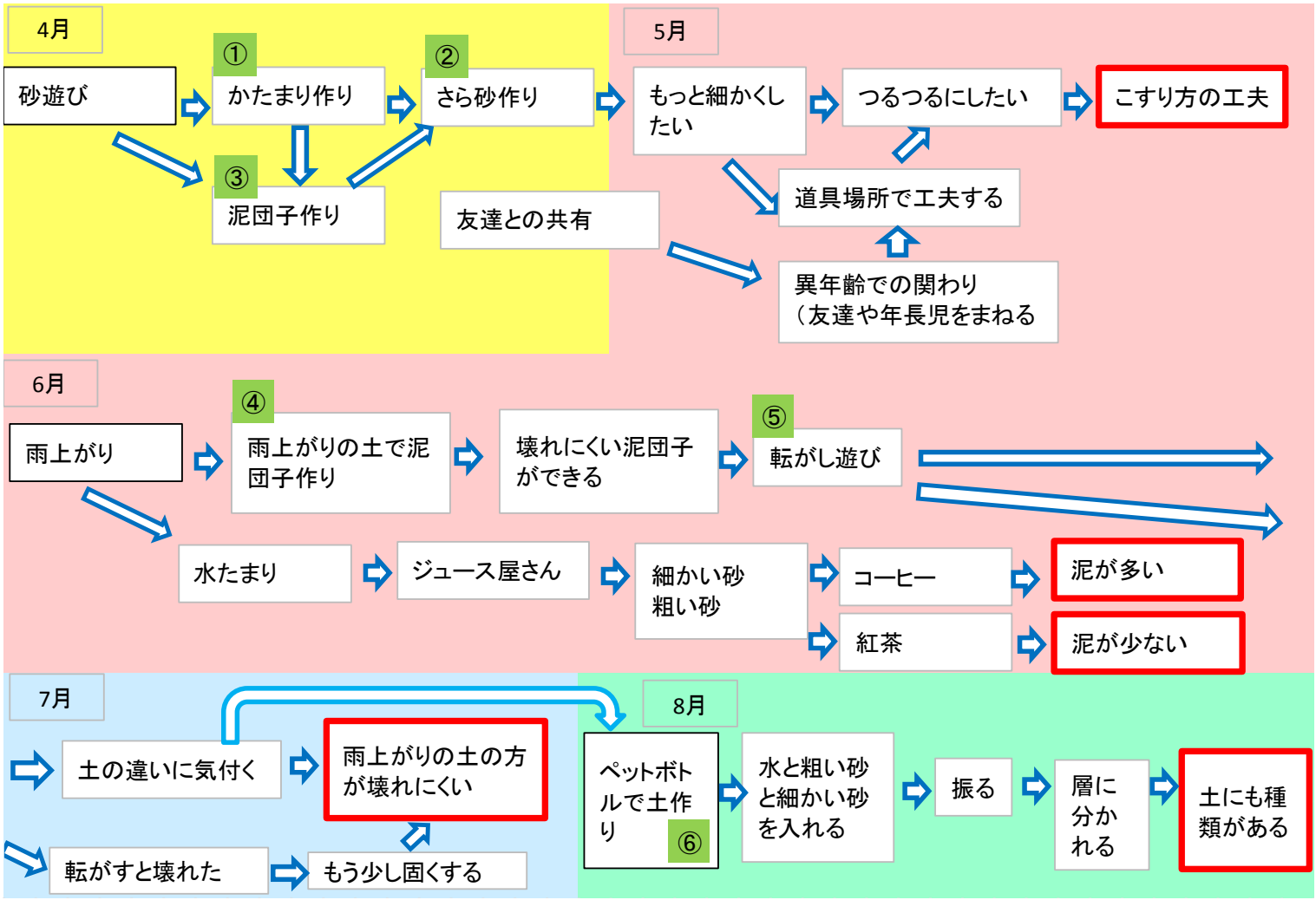
６、実践の考察

今回「あそびの足跡」というテーマを持ち活動に取り組んでいく中で２つのポイントが見えてきた。

１点目は保育者がある程度活動に見通しを持ち子どもと接することができるようになったことである。これは見通しが保育者自身の心の余裕に繋がり、そして子ども達の遊びを丁寧観察することに繋がり、結果として子どもの小さな気づきやサインに対して保育者が適切な物的環境、人的環境を用意することができ遊びがスムーズに展開される場面が増えてきたように感じる。

２点目は振り返りの視点である。ともすれば疎かにされがちな振り返りであるが「あそびの足跡」としてその時、その場面での子どものつぶやきや表情、思いなどを記録していくことで、より本物に近い記録を残していくことができ、その記録を元に子ども達が次にどんな遊びを展開していくのか、予想することができるという好循環が生まれてきた。

４歳児きりん組　砂遊びから始まる足跡



子どものつぶやき・表情・思い		
①もっとつるつるにしたい！	④いつもと土がちがうね いつもと違うさら砂できた	⑤（壊れても）大丈夫、大丈夫 きれいなさら砂で固くした
②平らな皿がやりやすい	③こすって光らせたいな	⑥（割れた層を見せて）なんか線できてる さら砂はふわふわ、大きな石があるとざら砂

結果的に途中で途切れてしまう「あそびの足跡」もあるが将来的にその経験が違う場面で子ども達の中で新たな創造性の芽生えとなり新たな科学する心に繋がっていくと確信している。

そして下記表に各クラスの論文内での印象的な「気づきが確信・自信に変わった瞬間」と活動を通して育った力をまとめた。これらの育った力をベースに更なる「あそびの足跡」の歩みを進めていきたい。

今年度の活動を通して育った力・気持ち

	気づきが確信・自信に変わった瞬間	活動の中で育った力・気持ち
0歳	・できなかったことができるようになったとき ・繰り返し遊んで「できた」という気持ちが増えていくとき	・触ってみたい、確かめたい（口に入れる）、やってみたいという気持ち
0・1歳	・体験した中でいろんなことが重なりおもしろいと思ったとき	・伝えたい気持ち（「あ！」と指をさして教えにいく） ・やってみたい気持ち（友だちや保育者の遊びを真似る）
1歳	・「できた」ことが増えていくとき ・時間が経った後同じように遊んでも同じ結果になったとき（経験が活かされている）	・試行錯誤しようとする気持ち ・何度も試そうととする気持ち
2歳	・目的としていたもの、ことができたとき。	・気づいたことを保育者や友だちに伝える力
3歳	・実際に体験できたとき	・観察する力 ・簡単な疑問を解決する力
4歳	・目当てのものができたとき ・友だちと意見を共有し、共感したとき	・目当てを持って遊ぶ力 ・比べて気づく力
5歳	・失敗から新たな方法が生まれた時	・協力して観察する力 ・知りたいという気持ち ・友だちへ伝える力

8、今後の方向性・計画

メインテーマである「あそびの足跡」として遊びを継続することで保育者の意識が変わり、子どもたちは今まで以上に「なんだろう？」「試してみよう！」という気持ちが大きくなり意欲的に遊びを楽しんでいる。

保育者は常にアンテナを伸ばし子どもたちの様々な気づきを見つけたり、繰り返し同じ遊びを楽しめる環境作りや、遊びの時間の保障をしていくことが大切である。

クラスの枠にとらわれず、異年齢間で意見交換をしながら子どもの気づきを共有し、アイデアを出し合うことで楽しい遊びが広がったり、遊びが深まっていけるようにしていきたい。

これからも、気づきをより深めていくにあたって子どもの体験をつないでいく『あそびの足跡』を継続し、その中で「やっぱりこうだったんだ」と“気づきが自信・確信になる”ことが増えていくことを大切にしていく。

9、園内研修の取り組み

これまでの園内研修

・各クラスごとに、子どもの姿をミニドキュメンテーション形式で発表。
・クラスからの一方方向発信になっていた。

新たな試み

・遊びの内容を月日を追って図式化（ウエブ）し「あそびの足跡」を残していく。
・クラスの遊びを他クラスの保育者が発表することで全員が共有する
・小グループに分かれてクラスの遊びを聞き、意見交換をする。

こんなことが気づけた

・他クラスの遊びの内容を深く理解しようとする気持ちが出てきた。
・説明をすることで、頭で整理をして考えるようになった。
・小グループで行うことで意見交換がしやすくなった。
・アドバイスから遊びの視野が広がり、色々な遊びを楽しめた。
・**「あそびの足跡」をたどる**ことで、遊びの繋がり・広がり・深まりが見えやすく、意識を持って取り組む気持ちが大きくなった。
・あそびが途切れてしまった理由（興味・声掛け・環境不足など）について自分自身を振り返り、見直しから新たな遊びにつなげていけるようになった。

研究代表者・関口　美都　執筆者・吉村　和秀